講　評

2023 年度院生優秀論文賞　授賞論文

椙江亮介（埼玉大学大学院）著

「生産技術システム・グローバル情報システム移転のダイナミック分析
　－日本のものづくり企業の事例分析―」

（『国際ビジネス研究』第 15 巻第 1 号、2023 年 4 月）

学会賞委員長　白木三秀
（早稲田大学名誉教授）

本論文は、研究目的と研究課題に沿い適切に選定された研究対象に対して、対象企業が 1 社ながら長期にわたる丹念なインタビューを実施したケーススタディである。方法論、先行研究に対する理論的貢献も明快・明確であり、研究論文として優れている。

多国籍企業内での生産技術システムとグルーバル情報システムの移転プロセス及び相互作用と促進要因についての実態を解明し、両者の移転に関する相互作用はどのようなものか、促進条件は何かについて考察した。本論文の試みは、挑戦的な研究課題であり、グローバルな企業活動に関する広い意味で DX 化をテーマにした今日的な研究といえる。

ただし、論文タイトル、リサーチクエスチョン、論文内でのケースの考察において、認識のずれと不十分さを感じさせる面もあることは否めず、いくつかの課題や要望は残る。

第 1 に、情報システムの国際移転という筆者の認識と、グローバルに情報システムを構築するケースの記述が、読者に違和感を与え、設定されたリサーチクエスチョンに適切な答えが提供されていない論文になっている。社内での情報システムの構築を、情報システムの国際移転ととらえる点である。情報システムの国際移転プロセスを明らかにするという論文の主旨からすると、ケースでとらえられる情報システムの国際移転は、各海外子会社を情報システムでつなぐ、システムを導入するという作業であり、情報システムの移転というよりも、グローバル情報システムの構築といらえられる記述であった。本文中の「5.2 相互作用プロセス」で展開されている分析は、多国籍企業内での生産技術システムの国際移転が、多国籍企業内に構築されるグローバル情報システムによって、どのような影響を受けるかというリサーチクエスチョンであれば、より効果的な分析ができたのではないかと考えられる。

第 2 に、グローバル情報システムの導入初期（日本と中国の 2 国間関係）、導入後の国際的な拡大とシステムの質の安定期（日本、中国、ベトナムの 3 カ国関係）というような分類も可能で、そうした方が、生産システムの変化について、よりクリアな分析ができたのではないかという課題が残った。

第 3 に、リサーチクエスチョンに対してケーススタディから例証される回答ないしインプリケーションが限定的であると筆者も認識しているように、もう一段抽象度の高いレベルから、例えばバートレット・ゴシャールの多国籍企業組織の 4 つの型に対する 2 つのシ

ステムの相互作用と促進条件が包括的に明示されれば、論文としての説得力は高まったであろう。

こうした課題や疑問の余地はあるものの、本論文から明らかにされた事実や、理論的な貢献、および実務的な貢献を総合的には考慮すると、本論文は受賞に相応しく、学会賞審査委員会は、全員一致して本論文を 2023 年度（第 30 期）院生優秀論文賞に値するものと判断した。

以上